

早稲田の杜に集まれ！稲門祭2026 HOMECOMING DAY 同日開催

苦節7年半、歓喜の優勝！

～1990年春 野球部15シーズン振りのリーグ優勝を振り返る！～

日時：2026年10月18日(日)14:00～15:30 会場：早大早稲田キャンパス8号館 B107教室

・入場無料・事前申込不要（先着順）・満席の際は入場を制限させていただく場合があります。

今年で創立125周年を迎えた盟主・早稲田大学野球部。

昨年の稲門祭では、1982年(昭和57年)秋の早稲田大学創立100周年Vを採り上げた。

以降、年号が昭和から平成へ移り変わった1980年代後半まで。それは、まさに苦難を極めた時代だった。

その優勝から久しく苦節7年半、15シーズンという早大野球部史上最長の期間、天皇杯から遠ざかった。

そして迎えた1990年(平成2年)春季リーグ戦で、歓喜の優勝を果たした！

勝ち点を取った方が優勝という天下分け目の頂上決戦となった伝統の早慶戦。

1勝1敗のタイで迎えた第3戦。社会現象にもなった早慶戦の熱い戦いをクローズアップします。

この36年前の30回目の優勝を、当時の主力選手たちをお招きして「今だから話せる」知られざるエピソードや「ここだけの」秘話、熱き思い出を大いに語っていただきます。

<野球部出演者>

市島 徹 いちじま とおる (1991年卒)

(当時教育学部4年 投手 鎌倉高出身)

小宮山悟監督卒業後エースの座を託され、まさに背番号「11」に相応しい投球でこのシーズン全校から勝星の7勝を挙げた。三回戦にもつれ込んだ法大、明大、立大戦をいずれも市島の完投勝利で、勝ち点を死守した。



中澤 範行 なかざわ のりゆき (1991年卒)

(当時人間科学部4年 中堅手 桐光学園高出身)

堂々たる体格で長打力が魅力。上杉、斎藤、中澤のクリーンアップトリオはチャンスに強く、早慶三回戦も、3人で4打点と攻撃の原動力となった。守っても矢のようなバックホームで慶大の追加点を阻んだ。



川原 潤一 かわはら じゅんいち (1992年卒)

(当時人間科学部3年 一塁手 常総学院高出身)

翌年の主将。内外野をソツなくこなすユーティリティプレイヤー。攻守ともに勝負強い堅実なプレーで優勝に貢献した。また、明るいキャラクターでムードメーカーとなって4年生を盛り立てた。



鈴木 浩文 すずき ひろふみ (1993年卒)

(当時社会科学部2年 二塁手 関東第一高出身)

翌々年の主将。父も早大野球部出身の親子鷹。優勝メンバーで唯一のスタメン2年生。3年生の秋に首位打者。卒業後はヤクルトスワローズへ入団。現在は、早大野球部コーチを務めている。



優勝の立役者のみぞ知る、感動の秘話満載のトークショーをお楽しみに！！

<司会進行> 初田 啓介 はつた けいすけ (1993年卒)

(当時第一文学部2年 アナウンス研究会所属 早稲田大学本庄高等学院出身)

TBSアナウンサー。プロ野球日本シリーズやK-1などのスポーツ中継を多岐に渡って担当し、TBSスポーツ番組の「看板アナウンサー」として幾多の名場面を実況。世界陸上ベルリン大会の実況は高く評価された。スポーツの他にも情報番組などを、幅広く担当している。



司会はTBSのスポーツ実況でお馴染みのアナウンサー！

主催：2026稲門祭実行委員会 企画広報本部
協力：稲門倶楽部・早稲田大学野球部・早稲田スポーツ新聞会

早稲田の杜に集まれ！
稲門祭
2026.10.18 SUN
HOMECOMING DAY 同日開催

☆クローズアップ!! 天下分け目の早慶3回戦

優勝 早稲田大学
10勝4敗(勝ち点5)

☆苦節15シーズン

・1982年秋優勝から1990年春優勝までの7年半の道のり。
※東大以外は全校優勝している。
・1990年春時点の優勝回数。
早30回、法33回、明24回、
慶24回、立10回、東0回
※この時点では、なんと法大に抜かれていたのです。
・2026年春時点の優勝回数。
早49回、法46回、明44回、
慶41回、立13回、東0回
※その後の復活で盟主の座に振り返っています。

（早稲田スポーツ新聞会史上初の優勝号外）

15季ぶり30回目の栄冠

早稲田スポーツ



早稲田00101020003
00101121X63

早稲田歓喜の優勝

大越好リリフ

青藤勝ち越し二塁打

試合経過

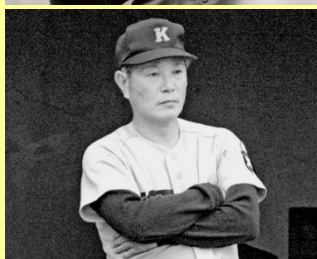
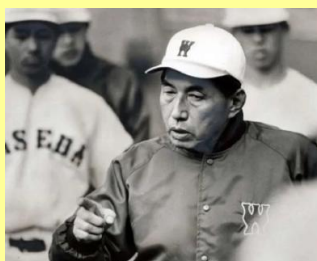
日付	相手	勝敗	スコア	責任投手
4.14		○	2-1	市島
4.15	法大	●	3-5	渡辺
4.16		○	4-0	市島
4.28		●	2-4	市島
4.29	明大	○	8-3	大越
4.30		○	5-3	市島
5.6	東大	○	2-1	市島
5.7		○	4-2	大越
5.19		○	6-1	市島
5.20	立大	●	7-8	渡辺
5.21		○	5-2	市島
6.2		○	4-3	市島
6.3	慶大	●	1-5	大越
6.4		○	6-3	大越

☆勝った方が優勝の早慶戦

※早慶1位2位・・・東京六大学野球101年の歴史で22回。
早慶戦前で、早大8勝3敗(勝ち点4)、慶大7勝3敗(勝ち点3)。
勝ち点を挙げた方が優勝。両校が優勝をかける早慶戦は実に12年ぶり。
※1990年は『早慶戦現象』という言葉が隠れた社会現象になった。
当時は間違いなくこの言葉が流行ったはずだが、残念ながら現在では
ネットで検索してもヒットしません。。
※早慶戦がスポーツ新聞、概ね全紙の1面を飾ったのは、これ以降は、
かの斎藤佑樹主将(2011年卒)が、「持ってる」を流行させた2010年秋、
50年ぶりの早慶優勝決定戦まで20年間無かった。

☆エース市島の奮闘！涙のワケは？

7回途中まで、エース市島は、限界を超越して激投した。
3-3の同点、7回表1死満塁の緊迫の場面で、市島が突如降板することとなり、マウンドに集まった皆が涙した。果たしてその『涙の交代劇』の真相は？「あとは頼むぞ！」と言って、1年生の大越基にマウンドを託した。そしてスーパールーキーは、たった1球で慶大主将・橋口をホームゲッツーに仕留め、絶体絶命のピンチを脱した。その裏、上杉、斎藤の連続二塁打などで2点勝ち越し。8回にも上杉のタイムリーヒットで1点を追加。6-3で勝利し、見事に優勝を決めた。



☆早大 石井連藏監督 vs. 慶大 前田祐吉監督

歳が2つ違いの2人には宿命の関係性がある。1960年秋、伝説の早慶六連戦を指揮、当時は20代で青年監督対決としても話題を呼んだ。その後、早慶の低迷を脱すべく、共に両校史上唯一無二の2度目の監督に就任。第9代・14代まで同じだ。1990年の春のリーグ戦において、早慶戦史上に残る名勝負を展開した。出身校は、石井=水戸第一、前田=高知城東(現・追手前)と共に県下一の県立進学校。選手時代は、投打の「二刀流」として活躍したことまで一致している。奇しくも石井と前田は2020年、揃って日本の野球殿堂入りを果たした。

【石井連藏】(いしい れんぞう 1932年6月26日~2015年9月27日)
“鬼の連藏”と呼ばれ、その猛練習は「千本ノック」に代表される。「逃げた選手を追いかけてノックするうちに、グラウンドを一周してしまった」という逸話の持ち主。
【前田祐吉】(まえだ ゆうきち 1930年9月22日~2016年1月7日)
「エンジョイベースボール」をスローガンに掲げ、いかにも慶應ボーイという穏やかな紳士の風貌であるが、一たびグラウンドへ出るとしたたかな勝負師に一変する。